

## 四旬節第四主日

ヨハネ 9・1, 6-9, 13-17, 34-38

2017.3.25 高円寺教会 18:30 ミサ  
クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

マルティン・ブーバーが書いた古典的名著と言われている『我と汝』という本があります。その中に、関わりとして、「我と汝」という関わり方と「我とそれ」という関わり方があるとされています。

「我と汝」の関わりは、人と人との心が通った関わりです。今日の福音で語られたイエスと盲人との関わりです。人はいのちのあることばなしに生きていけません。だから、親しい関わりの中で、愛情あることば、心から心に向かっていくことばによって人は生かされていく。人がことばなしには生きていけないというのは、ある歴史家が書いた記録からも分ります。フリードリッヒ 2 世という領主は、両親のいない赤ちゃんを一軒の家に集めさせ、その子どもたちを養育するように命令した。赤ちゃんに必要なものをすべて与えたのですが、育てるときに話しかけることを禁止した。彼の狙いはこれでした。ギリシア語を話す両親に子どもが育てられたら、子どもはいつの間にかギリシア語を話すようになる。英語、スペイン語、ラテン語、ヘブライ語、どれも同じです。だから、もし話しかけないで子どもを育てたら、子どもはいったい何語を話し出すのだろうと考え、話しかけずに子どもを育てさせた。さて、子どもたちは何語を話したと思いますか？ 残念ながら、子どもたちはことばを話し出す前に死んでしまったそうです。人は「あなた」という存在から話しかけてもらえないと死んでしまうということがここから分ります。ですから、イエスに「あなた」という存在で出会った盲人は、イエスのことばによって目の見えない自分が死んで、目が見える新しい命を生きることになる。赤ちゃんだけではなく、人は生きていても、心から心に向かってくることばがないと生きてはいけません。

しかし、ファリサイ派の人はこういった盲人やイエスに対して「我とそれ」の関係で関わっている。「我とそれ」の関わりとはどのようなもののでしょうか？ 「我と汝」の関わりでは、「人とは誰か」という問いがある。その問いに対して「お友達だよね」、「お父さんだよね」、「お母さんだよね」、「息子だよね」、「娘

だよね」っていう関わりを示すことばで相手を表し、人を人として認めていることが分る。しかし、「我とそれ」の関わりでは、「人ってなんだろう」と問い、人を物として扱う考え方となる。ですから、人から名前を取り上げて番号を付けるような関わり方、あるいは、肩書とかレッテルや世間のその人に対する評価などで考え、関わる自分が自分にとって得か損かと考えたりする。「あなた」としての関わりではなくて、物としての関わりにすり替えてしまっている。そういった世界の中では人が「商品」という物になり、支配、攻撃、所有欲、快樂の対象として扱われることになります。それは人との関わりではなくて、「わたしとそれ」、物としての関わり、自分が思っているように相手はあるはずだと思いついでいる。でも、「あなた」という相手は予測不可能な存在です。それはお互いをよく知っているはずの家族の生活もそうだと思います。自分の一番近い人が何か得体の知れない存在だと感じてしまうことがあります。しかし、自分とは違う考え方を持つ「あなた」と言う存在を信頼し、心ある関わりを深めることによって、家族となっていく。家族とは血や遺伝子などの「それ」によるものではなく、「あなた」としての関わりなしに家族にはなり得ません。

盲人はイエスとの出会いによって、「我とそれ」の世界観から、「我と汝」の世界観へと変えられた。今まで「それ」としか扱われていなかった自分は、目が見えないだけでなく心の目も見えなくなっていた。でも、「我と汝」の関わりによって、目が見えるようになっただけでなく心の目も開かれ、「そうか、違う関わり方やあり方があるんだ。自分は今まで『物』として取り扱われていたけど、そうではなくて、人間として関わってもらえるなんてとってもいいことだな、素晴らしい」ということが見えるようになった。

ファリサイ派の人のように、宗教的權威のことばを聞いて神が「分かった」と思いついでるなら、神との関わりでさえ「我とそれ」の関わりにしてしまう。このような世界観であれば、神を物へと変換し、人間が神を支配しようとしてしまいます。

「我とそれ」の世界の中で盲人になっていた人が、イエスとの出会いによって目が開かれ、人間性を回復しました。わたしたちも、このミサの中でイエス様に出会って心の目が開かれますように共に祈りましょう。